



第
28
回

茨城 建築 文化賞

茨城県知事賞〔最優秀賞〕



土浦市立土浦小学校

株式会社 横須賀満夫建築設計事務所

協力事務所― 構造：(有)崇建築研究所

電気：川又設備計画

機械：菊地設備設計事務所

所在地―土浦市大手町12-1 他

設計主旨―

歴史的景観との調和

周辺に残る多様な自然文化遺産との調和を図り、地域文化を育む役割を担うことを意図しました。

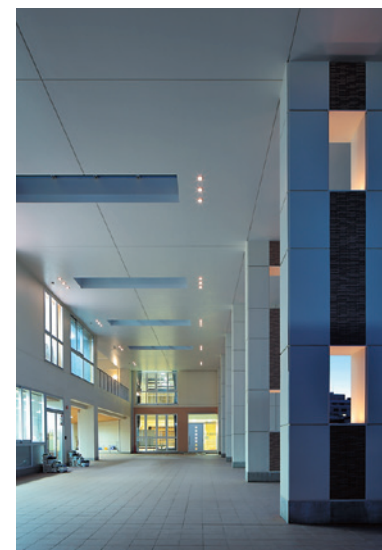
この地の『景観づくりやまちづくり』に教育施設として参画することで、学校とまち、そして人々をつなぐ新しい教育空間を提案しました。

校舎は機能ごとに分節することでボリューム感を抑え、勾配屋根の連なりや近隣建築に見られる縦格子をモチーフとしたルーバーなどにより街の風景との調和を図りました。

様々なアクティビティを生み出す学習空間

施設は大きく管理諸室、普通教室、特別教室、屋内運動場からなります。それぞれの機能は中央のコミュニティーホールによって緩やかに結ばれます。このホールは3層吹き抜けとなっており、学校全体を一体化させるとともに、展示や発表会など弾力的な活動が行えるアクティビティに富んだ空間です。

普通教室は学年ごとのユニットで構成されています。普通教室の延長領域である多目的スペースは、クラスごとまたは学年ごとの利用が可能な形態とし、様々な学習形態に対応できるものとなりました。





茨城県議会議員賞 [優秀賞]



行方市立玉造小学校

株式会社 須藤隆建築設計事務所

協力事務所— 構造：(有)戸田巧建築研究所

電気：(有)岩坂設備設計事務所

機械：(有)須藤設備事務所

所在地— 行方市玉造甲3200

設計主旨— 玉造地区の小学校6校を統合した学校です。地域になじむデザインとして切妻屋根を採用し、和のテイストを織り込んだ学校です。スクールバスでの登校のため、安全に配慮しながら、屋根のある正門・ウェルカムゲートを通り雨に濡れない工夫をしました。校舎と体育館は別棟で間を通れるようにしました。体育館のステージは屋外ステージと連続して設け、外壁には木製の格子を取り付け、和の雰囲気を出しつつ「玉をつくる」イメージを穴と重ね、格子で表現しました。重ね格子は正面のみ見えます。校舎は内装木質化に努めながら、和のテイストとして摺上げ障子や草木染め風タイル・ろうけつ染め風の和紙を採用。空調設備が見える工場見学風のコモンや上履きのまま利用できる中庭・デン、図書室に読み聞かせ用の「ごろんステージ」など児童の居場所づくりを心がけました。屋外便所に型枠コンクリートブロック造を採用するなど意欲的に取り組み、質の高い教育施設を目指しました。

茨城新聞社賞〔優秀賞〕



石の百年館



株式会社 ジェイアール東日本 建築設計事務所

協力事務所— 構造・電気・機械：
（株）ジェイアール東日本
建築設計事務所

所在地— 笠間市稲田字川西 2307 番 1

設計主旨— 茨城県笠間市の地場材である稲田石の魅力を伝える観光交流センター。石切場の程近くにあった岩石資料館を JR 稲田

駅の隣地に移設し、市運営の観光交流センターとしてリニューアルする計画である。

旧資料館の外壁材は、現在では希少な技法で一つずつ削り出された、大きさ 300 × 930 mm、厚さ 90 mm という重量感のある稲田石である。魅力にあふれたこの外壁材を再利用して複数の石の箱をつくり出し、展示室としてプロットすることで、石の箱を巡っていく構成のミュージアムとした。この構成によって、均一な環境の展示室を順路通りに周る

従来のミュージアムではなく、様々な大きさや表情をした石の箱を旅のように巡る楽しさをつくり出すとともに、建築自身を町なかの展示品にしようと考えた。また複数の石の箱を大きな一つのガラスの箱の入子にすることによって、移動の空間を石に囲まれた開放的な交流空間に変換し、交流の風景、展示室内部の様子を積極的に外部へ表出させた。



茨城県土木部長賞〔優秀賞〕



茨城県立水海道第一高校 管理・普通教室棟

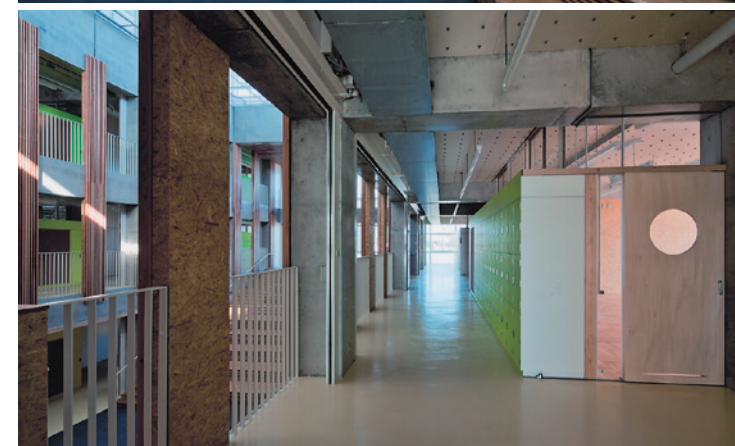


株式会社 三上建築事務所 株式会社 眞建築設計室 建築関連業務共同企業体

協力事務所— 構造：（株）三上建築事務所、
大賀建築構造設計事務所
電気：（株）三上建築事務所
機械：明野設備研究所

所在地— 常総市水海道亀岡町 2543

設計主旨— 水海道一高は、特に立志・自学自習を重点項目において単位制運営方式を採用する茨城県内有数の進学校である。鬼怒川沿いの亀岡と呼ばれる小高い丘に建ち、多くの人材を輩出した本校は、名実ともに水海道地域のシンボルとなっている。敷地の高低差を活かして既存施設との良好な関係性を築きながら、1 学年 7 クラスの校舎を南北軸の 5 階建てとした。二つの教室の間にアセンブリスペースを設けて単位制運営方式に対応し、センターホールを中心として東西に教室を配置することで、小さなフットプリントを実現した。



[入選]

東海村立照沼小学校



株式会社 横須賀満夫建築設計事務所

協力事務所― 構造：(有)崇建築研究所

電気：川又設備計画

機械：菊地設備設計事務所

所在地―那珂郡東海村大字照沼913-1 他

設計主旨―「人と自然と文化のコミュニティスクール」を基本テーマとし、地域と学校の綿密な繋がり、子供同士の触れ合い、読書環境の充実を計画の基本としました。健康的でぬくもりの感じられる教育環境とするため、教室は南面採光の健康配置とし、この地のもつ豊かな自然環境を教室に取り込みながら、安全で心地の良い学校づくりを行いました。

普通教室は小規模校(単学級)の特色を活かして、子供たちが校庭などの屋外にすぐに出て活動ができる平屋建て校舎としました。低学年ユニットと高学年ユニットを半屋外の中庭(コミュニティテラス)を挟む形で配置し、異学年交流を促すようにしています。また屋上緑化を施したテラスは、特別教室と連携した屋外学習テラスとして積極的に活用できるようにしました。

屋外には「てるぬま広場」、自然観察広場、収穫のみちなどの体験施設を設けており、地域の方と収穫祭等とともに、地産地消を实践する食育教育が行われています。

[入選]

潮来市立潮来小学校

株式会社 パル総合設計

協力事務所― 構造：(株)STRデザイン、

(株)ホルツストラ

電気：(有)東匠設計事務所

機械：菊地設備設計事務所

所在地―潮来市潮来471

設計主旨―2つの2階建て木造棟は、集成材を一切使用せず、八溝山系の杉製材を用いている。長さ6m、梁成360mm以下の標準的に入手できる材料で構成し、多量の木材の確保の問題をクリアした。一般住宅でも用いられる仕口金物を使用し、人材の確保とともに



に、コストダウン、人材の育成にも寄与している。

8.1m×8.1mの教室部分の2階床は、120×360断面の2段ㄱ型重ね格子梁として支持させている。屋根は木造張弦トラスとしている。水平抵抗要素は、両方向とも構造用合板張り耐力壁で、桁行方向は構造用合板両面張り、釘ピッチ75mmとし、詳細計算法により、12倍相当の許容せん断耐力としている。

現地に立つと、RC造と木造の校舎の通常時の柔らかさの違いに気づかれる方も多いようだ。木造の利点はまだまだ計り知れないが、現場に立つ教師からの、インフルエンザにかかる児童が減ったという報告を聞くと、子供たちへの影響は少なからずあるようである。



[住宅部門 優秀賞]

常陸太田の家



丸山耕平建築設計事務所

協力事務所― 構造：(株)ビーキューブ

電気：丸山耕平建築設計事務所

機械：丸山耕平建築設計事務所

設計主旨―敷地は、田園風景の中を横断する幹線道路に南側で接する旗竿地。隣接する南・西側も居住者の所有地で、建物は幹線道路から少し引いた位置に配置される。そこに、親世帯が住んできた住宅を建て替え、4世代が住まう2世帯住宅を計画した。

西側に親世帯、東側に子世帯を配した平屋。各世帯の往来はバリアフリーでスムーズに行える。中央に緩衝体として中庭を設け、家族の距離感に配慮しながら、コミュニケーションの誘発とプライバシーの確保が適切にできるよう諸室を配置した。南側大開口の外に1.5m程の深い軒と縁側を設え、室内空間の広がりと、庭への緩やかな繋がりを持たせた。幹線道路からの視線干渉の緩和には、樹木の数を徐々に増やしなが、時間をかけて雑木の庭を造っていく計画。

慶事などには、近くに住む親族が多く集まり、孫世代まで20人近くになるとのこと。子世帯には、小上がりの畳敷きの座敷を設けて、旦那衆が座卓を囲める場とした。

[住宅部門 優秀賞]

「わ」の家

有限会社 宮本建築アトリエ

設計主旨―前面道路より地盤が約1m高く、4辺を塀で囲まれた住宅地の建替え計画です。道路側は各戸の擁壁兼用の塀が約2mの高さで連なり、閉鎖的印象のある通りでした。建て主の、人が集い、楽しく過ごせる温熱環境対応のゲストハウスのような家というご希望に沿うよう、「わ」、つまり「話・和・輪・環」を意識した計画にしました。

道路側には塀を設けず、緩斜面にして木立の庭を設けました。その木立を、道路・スロープになっている玄関までのアプローチ・LDKが囲み、人と住宅、住宅と街とがよりつながるように計画しました。個人住宅も社会資本の一つであるという認識を建て主と共有し、庭である木立空間の、通りとの共有性に配慮しました。

人と話がはずみ、和み、人と住宅と街とが輪になり環境に対応した「わ」の家としました。



【入選】

社会福祉法人武仁会 特別養護老人ホーム鉾田サンハウス

株式会社 三上建築事務所

協力事務所ー 構造：(株)三上建築事務所、
大賀建築構造設計事務所
電気：(株)三上建築事務所、
前川プランニング
機械：(株)コアブレイン

所在地ー 鉾田市鳥栖2100-9

設計主旨ー 幾重に繰り返される緩やかなアンジュレーションは、この地域特有の地形である。まだまだ多くの平地林が残っている。そのような自然の中で利用者が快適に生活することができ、その家族が安心して託せる施設となることを目指した。

建物は南北に貫くメイン通路を軸とした明快な平面構成を、緩やかな波型の大きな一枚の屋根で包み、周辺の平地林と調和した、明るく、開放的な施設とした。リブ状の壁柱をグラデーションを描くように彩色し、暗く地味になりがちな施設のイメージを払拭することを意図した。



【入選】

まつやま大宮保育園

株式会社 アルコデザインスタジオ

協力事務所ー 構造：aR構造設計事務所
電気：(株)環境エンジニアリング
機械：(株)環境エンジニアリング

所在地ー 龍ヶ崎市大徳町4921

設計主旨ー エディブルガーデンと自然環境による、自然とともに暮らす保育園

東日本大震災の建物耐震診断の結果閉鎖となった保育所の跡地に、「まつやま大宮保育園（認可）」として再生した事業です。

計画地にはかつての園舎とともに成長してきた大きな樹木が生い茂っており、この大切な資産を受け継ぎながら、園内に多種多様な植物で彩られた散策路、子どもたちの冒険心をそそる大きな築山、生活動線上に連続し

て設けたエディブルガーデン（食べられる庭）などを設けることにより、子どもたちが土と水と太陽とたわむれ、自然の恵みを体全体で味わい、五感を育み、人間力を身につけられる保育環境の実現を目指しました。

建物は複数の棟に分割し、大きな施設ではなく一つの集落としてデザインし、園庭は日常生活の場として捉え、子どもたちの創造力を喚起するよう豊かな自然環境を整えることに注力しました。エディブルガーデンでとれた新鮮な野菜や果物を自ら調理できる設備を整え、食や自然に関する興味を促すように計画しました。



【入選】

大成女子高等学校

合同会社 建築工房 koakutsu

協力事務所ー 構造：(株)エス・ディ・フレックス
電気：(有)岩坂設備設計事務所
機械：(有)ワールド設備設計事務所

所在地ー 水戸市五軒町3丁目1264-3 他

設計主旨ー 当該施設は、2011年に発生した

東日本大震災で校舎の大多数が使用不可能となり、生徒たちは限られた校舎での不自由な学校生活を強いられた。その状況を一掃し、明るく清潔感のある思い出に残る学校の提案に努めた。

〈限られた敷地〉

市街地にあり、敷地の狭い当該地は、校舎

が窮屈に配置され、生徒間の交流スペースが少なく、管理するにも死角が多い配置であった。今工事では、芝生スペースや開放感のある校内通路、正門をくぐれば街の雑踏の中から解放されつつ、静清たる学び舎としての緊張感のある空間作り、また、死角のない管理の行き届く配置とした。

〈明るく清潔感のある校舎〉

清潔感のある白を基調にした内装に、教室入口やWCなど、赤やオレンジ、青といった明るく遊び心のある配色にした。また、友人や先生とのふれあいの場となるコミュニティスペースや円形の広い洗面室など、従来の学校建築にはない『女子高らしさ』を念頭に空間作りをした。



【入選】

くぼたクリニック

株式会社 K建築設計事務所

協力事務所ー 構造：KK構造設計室
電気：SEC設計
機械：池田設備設計

所在地ー 常陸太田市金井町3566番の一部、3566-3、3566-4

設計主旨ー 約40年間地域医療に貢献してきた既存のクリニックを改築した、常陸太田市街地に位置する耳鼻咽喉科と産婦人科のクリニックです。

耳鼻咽喉科は、季節により多くの患者の受け入れが必要なため、待合室は50人程度が入れる広さが要求され、待ち時間も多くなりがちのため、東側に隣接された公園を借景とできる位置に計画しました。診察部門は建物の中央に配置し、患者が待合に待機することなく処置まで完結できる形態としました。

外観は平屋建ての建物にありがちな単調なイメージを払拭するため、待合ホール部分の階の高さをアップして天井高を3.5mとし、連窓のアルミサッシによるサイドライトを採用し、明るい空間をつくりあげました。



〔第一次審査の経緯〕

3月16日に審査委員9名出席で第一次審査を実施した。今年の応募作品数は36作品で昨年よりやや減少したが、概ね例年通りの数。事前に応募作品の資料を各審査委員に送付し、それぞれ検討してもらい第一次審査会に臨んでいただいた。審査会場で掲示された作品を再度確認していただいた後に、まず一人10票の持ち点で住宅、リフォーム、建物の大小を気にせず投票してもらった。その結果、1票以下しか獲得できなかった作品については第一回投票で不合格とした。そこで残った作品については議論して、一人5票の持ち点で第二回投票に移った。その結果、5票以上獲得した5作品については現地審査候補作品とした。また2票以上獲得した2作品は入選とした。この中に住宅、リフォームが含まれていなかったことから、第一回の投票を参考に住宅賞1作品、リフォーム賞2作品を選んだ。またさらに、現地審査候補にならなかった作品に対して、一人2票の持点で第三回投票を行い、入選作品として3作品を追加選定した。

〔第二次審査（現地審査）の経緯〕

4月18日に審査委員9名で現地審査のために県内の各地にある5作品を見学した。夕方まで見学した後、直ちに第二次審査に移った。各審査委員それぞれ5作品について講評コメントをし、それを基にまた議論をした後、一人1票の持ち点で知事賞から順番に投票に移った。その結果「土浦小学校」が6票を獲得し知事賞に輝いた。その後再度議論をした後、議会議長賞の投票に移り、4票を獲得して「玉造小学校」が当選した。さらに議論をした後に、土木部長賞の投票に移ったが、「水海道第一高校」と「石の百年館」が同点の4票となった。そこで、どちらが土木部長賞、もしくは茨城新聞社賞に相応しいかという点を議論した結果「水海道第一高校」を土木部長賞、「石の百年館」を茨城新聞社賞とすることを全員一致で決めた。また「常陸太田の家」は住宅賞にまわすことにした。

〔各作品についての講評〕

今年もそれぞれレベルの高い5作品の現地審査を行ったが、書類審査ではわからない敷地周辺の環境等と建物自身をよく検討することになった。知事賞に輝いた「土浦小学校」はその中でも抜きん出ていた。土浦市立小学校として140年以上の歴史があるこの小学校は、また土浦市の景観上重要な亀城公園に程近い場所に位置している。都市内にあることから決して敷地は広くなく、また既存校舎を使いながら工事をする必要から、計画の制約も多い中、非常にコンパクトに校舎がまとまっており、加えて体育館も一体化されている。校舎は2列に配置され、その中間にトップライトのついた3階吹抜け廊下がある。その空間が多様な使い方ができるように工夫され、明るく気持ちの良い空間となっている。ただ、この構成については、比較的手馴れた設計である。他方、外観は周囲の歴史的雰囲気とマッチするように配慮がされ、門、塀、植栽等も歴史的景観を作り出す工夫がされている点も、審査委員から高い評価を得た。

議会議長賞に輝いた「玉造小学校」は、敷地のロケーションが大変良いというメリットを十分活かした作品である。新規の敷地に伸び伸びと建てられており、建物のディテールなども極めて完成度が高いという評価を得ている。各教室、少人数教室、低学年教室等々もたくみに配置され、中庭なども使いやすい計画となっている。しかし、2階部分のオープン廊下については、半吹抜けになって、トップサイドライトからの光が落ちて、伸び伸びとした空間になるのかと図面からは想像していたが、空調機が屋根裏に配置され、そのために十分な採光や空間量が確保できず、審査委員からも惜しむ意見が多かった。

次に土木部長賞に輝いた「水海道第一高校」は既存校舎を使いながらの増改築工事の計画である。そのため、校門から正面性がないなど、計画条件の厳しい中での労作と

〔リフォーム賞〕

E邸改修工事

株式会社 カナザワ建築設計事務所

設計主旨―震災で被災した民家を再生した。

瓦がすべて落ち修復も数カ月の間できずにいたため雨漏りがひどく、構造体の腐敗が心配される中での設計であった。

外観は今までの雰囲気を変えず間取りは現代の生活に合うように大きく変えた。

特に今回は土間ホールを二世帯のコミュニケーションの空間として大きな役目を持たせた。民家を住み継ぐことは住む人の記憶をつなぎ、地域の景観を次世代へつなぐ。そしてまたその工事にかかわる技術者、大工の技をつなぐこととなる。そのような意味で、民家の再生は日本の文化の継承と言えると思う。



〔リフォーム賞〕

中村様邸古民家再生工事

有限会社 吉田建築計画事務所

設計主旨―造園業として樹齢百年を超える巨木を扱う施主は、家業とともに曾祖父が地山の木材で建て、先祖が暮らしてきた築90年

の古民家を引き継ぎ、仕事場兼自宅へと再生した。

樹木を育てることを生業とする家らしく、土間を入ると重厚な梁組みや大黒柱が目に見え、土間は復元し、打ち合わせスペースとした。目隠しの衝立には丸く抜か



れた明り取りと障子をしつらえ、壁の珪藻土が空間全体を素朴でやわらかい雰囲気包む。白い漆喰と黒く塗られた簾子下見板張りの外観は、伝統工法により創建当時のイメージを訴求し、新たに設けた土間入口の底は、来客が入りやすい瀟洒なデザインとした。

建物全体をジャッキアップして揚屋し、ベタ基礎を作り、そこへ建物を固定した。さらに耐震壁を設けて大規模な構造補強を行い、併せて寒かった室内は樹脂サッシュや断熱材の充填により、十分な温熱環境を確保した。建物に使用されていた古材は積極的に再利用し、二酸化炭素排出削減へ配慮した。



いえよう。建物は、コンクリート打放と亜鉛メッキのメッシュやデッキという非常に工業的な素材を積極的・挑戦的に採用したデザインとなっており、設計技量が非常に高いことを示している。他方、内部空間に関しては、南北軸配置のために、校舎内部がなんとなく薄暗く、やや工業的で冷たい印象を与えていると評価された。また既存の校舎等との調和について配慮するというよりは、今回の建物は異彩を放っている感じで、そこでも評価が分かれるところだと思われる。

最後に茨城新聞社賞に当選した「石の百年館」は、稲田駅に隣接する小さな敷地に立地している。石の博物館ということで、ボックス状の石壁が使われている。それとガラス窓、軽い屋根という非常にシンプルな構成で、石とガラスと屋根の対比性を狙った優れたデザインである。他方、石という非常に重く訴求力のある素材を使っているが、敷地条件の制約上、引きが取れないため、石壁のよさが十分に活かされていない点が残念という指摘もされた。

今年も上位を学校建築が独占した。校舎の耐震建替え時期と重なったということもあるかもしれないが、今後は民間建築でさらにそれを乗り越えるような秀作が生まれてくることを期待したい。

審査委員

敬称略 順不同・役職は平成27年3月現在

小場瀬 令二

筑波大学名誉教授

小場瀬 令二 筑波大学名誉教授
小柳 武和 筑波大学大学院理工学研究科特任教授
長島 一道 筑波技術大学産業技術学部総合デザイン学科教授

江原 秀明 茨城県土木部技監兼都市局建築指導課長
山田 茂 茨城県土木部技監兼営繕課長
中村 浩 茨城県土木部都市局住宅課長
野澤 謙次 茨城県建築センター理事長
柴和 伸 茨城県建築士会会長